

鳥インフルエンザ—— 新しい展開への考察④

加藤宏光

安定は危機への道標

失敗は成功の母という。しかし、その逆もまた然り。多くの成功者は、その成功体験に溺れ易い。かのダイエーやソニーですら、成功体験の大であるがゆえに、市場の変化を自分の都合に合わせて解釈し、本来変革すべき路線を変化させることなく拡大して、失敗への道をたどったことは記憶に新しい。

鶏太にとって、HPAIの突発を克服することが容易であったことは、ある意味で成功体験といえる。そして、この成功体験の記憶がある種の危険をもたらすことには彼自身気づきようもなかった。HPAIはその名称が与えるイメージと異なり、ポディブローのように与える生産へのダメージは、HPAIより大きい。しかし、HPAIの経験がない間は弱毒という言葉を持つマイルドなイメージで、あたかも被害が少ないように誤解を与え、それゆえに防疫に隙間を与えがちである。

鶏太は人の経験しないHPAIの発生という経験をし、それを乗り越えるという成功経験もした。こうし

た時は人が最も隙を見せるものである。この後、鶏太が経験するHPAIについて、彼が意識しなかったことは責められはしない。しかし、彼の経験を他山の石とすることで、わが業界への警鐘としたい。

HPAIの経済損失

鶏太は、自分がHPAI被害者であることを特徴付けるとともに、それゆえに安全性の保証により、安全性を強調できるメリットを引き出すことに成功した。

しかし、彼の再起を支えたのは、父・鶏一郎が職人気質ともいえる一途さで追求して得た、彼のタマゴだけが持つ《美味しさ》であった。HPAI発生からの道のりを、資金の流れから見直してみると、その苦難の道が改めて思い起こされる。

HPAIの発生公示のあの日から二週目の入金を区切りに、二十日余りは製品の直接販売ができなかった。その間のタマゴはすべて廃棄処分に分けられた。当然、その行政補償はなされたが、基準はその期間の卵価に準じて行われた。

さらに、淘汰された本場一二万羽

については、羽当たりの補償がなされたが、その上限は六〇〇円であり、一羽当たりの金額は淘汰時点の経理的残存価格を基礎にして計算されたので、平均単価は四〇〇円余り、強制換羽鶏で産卵四カ月が経過したものでは、五〇円ほどにしかならない。

一方、淘汰後の本場は、徹底的な洗浄・消毒が実施され、おとり鶏が設置された。隔週で二度に渡る徹底的な検証により、AIウイルスが存在しないことが確認された。

「HPAI汚染農場は、淘汰の終了後、大ヒナが導入され、隔週でAIウイルスの感染確認が継続されます。現在、監視対象のウインドウレス鶏舎を取り巻く五キロ半径の検査領域では、監視期間は鶏が存在するため、AIウイルスの完全陰性を確認できません。このため、早期に淘汰されたオープン鶏舎の方が結果的には再稼働が早くなる、という皮肉な結果が出ています。行政では、この問題を現実の実態に摺り合わせるために、ウインドウレス鶏舎におとり鶏を設置し、一ロットでもウイルス陽性の結果が得られた時点で、その農場全体を殺処分する、という新

しい方針を建てました(十二月二十日開催の家きん疾病小委員会の検討結果を踏まえて)」

鶏太にとって大きなダメージは、HPAI発生以来、流通に正常卵としての引き取りを拒否されたこと、三農場三八万羽、一六トン余りのタマゴが加工用として、キロ当たり五〇円でしか処理できなかったことによる経済負担である。

HPAI発生当初に本場のGPが稼働できなかったため、コンテナ詰め原料卵として売却したことで、GPの稼働が許されてからでも、業者はコンテナでの荷姿でしか引き取ろうとしない。鶏太にとって何により辛いのは、これまで一生懸命製造してきたタマゴが産業廃棄物並みの扱いを受けることである。

実際もし、この業者がタマゴを引き取らないなら、このタマゴはどうにも処理の仕様がなない。それゆえに、業者の言うなりに泣く泣く屈辱的な条件を飲む自分に、悔しさをぶつけることもできない。

彼の生産コストを前提にして出る赤字は一日一〇〇万円を超えた。事前のシミュレーションに匹敵する金

額である。しかし、それも発生から五十日を超える頃には、従来のスーパーが徐々に取引を回復してくれたため、総額で五〇〇万円を超える程度に収まった。

神風

その年も暮れに近づき、業界に変わった風が吹き始めた。HPAIの発生は、それまでの増羽への意欲に冷水を浴びせる効果があった。この年の餌付けは、前年比で七割を大きく下回ったため、年末には若鶏の比率が減少し、小玉が予想を大きく上回る高値になったのである。

その年の正月明けに、業界始まって以来と言われる、キロ一〇〇円割れでスタートした鶏卵相場は、秋風の吹く頃には一八五円を超え、徐々に水準を上げた。十二月にはM基準で二三〇円を超えたのだが、その時にMSサイズは二六〇円、Sサイズは何と二七〇円にもなった。

鶏太の本場への大ヒナ導入再開は九月下旬で、十一月月上旬にやっと全鶏舎が埋まったばかりであった。この農場では、SからMSサイズが生産量の七割近い四トンを占め、その

相場差で得られる純利益差で一日一五万円に届く。鶏群の入れ替えが変則的となったために、四農場全体で二〇トンを上回って生産されるので、十二月に入って、一日の利益が一七〇万円にもなる。

それまでの損害を埋めるスピードの速さに、鶏太自身恐ろしい気持ちさえ感じていた。

『災い転じて福となすと言うけど、去年の騒動が起きた時は、一体どうなるのかと心細くてしかたなかった。でも、そのおかげで業界の増羽への意欲が削がれて、高卵価になった。よくもこうしてうまく乗りきれたもんだ、と改めて感じるね』

鶏太は屠蘇を傾けながら、ヒナ子に語りかけた。あの年の明けた元旦の夜である。生き物を生業とする採卵業には、盆も正月もない。それは鶏一郎の時代から、正月には従業員の休みを埋めるために、いつも忙しい思いをしてきた鶏太にとって、当り前のことであった。とはいっても、正月の夜、年賀状を捲りながら、遅い屠蘇を祝う頃には、いつもと異なっていた。改まった気持ち芽生える。HPAI騒動で振り回された昨年を、後半の高卵価で何とか乗り切っ

た鶏太とヒナ子にとっては、特別の思いが心に湧いていた。

「本当に大変でしたね。でも、貴方の突き進む道はいつも開けるのですね! 私、感心してしまいます」

ヒナ子も盆を傾けながら、答えた。「おまえの頑張りで、直販が予想より早く回復したからだよ。感謝してる」

鶏太は改めて、かの日にコンビニの子供がタマゴを買いにきてくれたこと、ヒナ子とその子の会話を思い出しながら、感謝の気持ちを伝えた。「もう、あんなことってないですよネ!」

「そりやそうさ、去年だって、何で俺の農場だけにあんな事件が起きたのか。そんなことが何度もあってたまるものか!」

ヒナ子の問いに、鶏太は自分言ひ聞かせるように答えた。

「筆者は、二〇〇四年一月に発生したHPAIに際して、種々の推測をしました。その経過がほぼ終息へ向かい始めた頃、親しいクライアントにいつもこんなことを話していました。『今回のHPAIは山口、大分、京都ですから、一足飛びに関東まで

飛ぶことはないでしょう。さまざま
なモニタリングでリスク分析を続
け、事前に危機を推測して、行政へ
の対応を促すしか対策はないので
から、拡散にかかる時間しか武器が
ないのが実情です。しかし、今回
水海道に発生したLPAIは、事前
のリスク分析に時間と機会を与えて
くれませんでした。こういった事態
が起きうることを踏まえて、種々の
対応方法を検討する必要性を教えら
れた気がします」

被害の実態

一五五円で始まった年明けの相場
は、昨年の卵価史上の最低相場を忘
れたように、二月には昨年末の卵価
に匹敵する二四〇円(Mサイズ)をマ
ークした。

例年二月には相当の高値をつける
ものの、年末相場に届くほどの卵価
が出た年はない。昨年までの低卵価
で嫌気をさしていた上に、HPAI
の衝撃で完全に増羽意欲を削がれた
ために通常、卵価が持ち直すと間も
なく餌付羽数が増えるものである
が、昨年は高卵価にもかかわらず、
年末まで増羽傾向は抑えられた。

二月の卵価水準をもとに、餌付け
が増え始めたとしても、九月までは
生産基盤となる成鶏羽数は増えよう
がない。ただ、あまり卵価水準が高
い場合には、加工用のタマゴが輸入
されることによって、相場が冷やさ
れるかもしれない。

「本来、餌付羽数からすると、昨年
の相場はもつと高水準で推移しても
よいと考えられていました。しかし、
昨年の上半期に二〇万トンの加工用
液卵がブラジルやヨーロッパから輸
入され、これによって、九月以降の
相場は相当に冷やされたといわれま
す。これから、実際に卵価が高水準
に過ぎると、二〇〇万トンといわれ
る加工用のタマゴが安い国から輸入
され、相場が冷やされる、という事
象が当たり前になってくるのかもし
れません」

昨年のHPAIによる被害は、タ
マゴの販売ルート喪失によるものが
約六〇〇万円であり、急遽導入の
必要に迫られた大ヒナ用資金として
一二万羽分、約八四〇〇万円、その
他の流動資金として二〇〇〇万円ほ
どを要した。

これに対して、淘汰への補償金額
は四八〇〇万円、積み立てから得ら
れた補償金が羽当たり四〇〇円で四
八〇〇万円、加えて、淘汰完了まで
に廃棄したタマゴ補償金とその間の
相場を基準としてキロ一二〇円(実
質五トン/日で十日分となったた
め、六〇〇万円)となった。これら
の補償金を合わせると一億二〇〇万
円で、差し引き六四〇〇万円が実質
被害として計上された。

鶏太は、HPAI発生の当初に得
た、銀行からの繋ぎ資金一億五〇〇
〇万円に自己資金を加えて二億円弱
を準備していた。行政からの補償に
は、ある程度時間が必要とされる
と考えたためである。昨年末の高卵
価と小玉の卵価水準が特に高い、と
いう神風に助けられて、HPAI被
害を年内に消化できたため、鶏太は
持ち前の積極性を取り戻していた。

慣れの怖さ

鶏太の農場周囲には、蔬菜農家が
多い。養鶏経営にとつても鶏糞の処
理は大きな問題である。鶏太にとつ
ても、鶏糞をいかに処理するかは避
けて通れない課題であった。

そもそも葉モノ野菜は、窒素肥料
を多く要求する。葱、ほうれん草、
キャベツ、白菜等々の葉モノのなか
で、養鶏にとつてありがたい野菜に
韭(ニラ)もある。これらの野菜には、
成分でも根焼けの起きないものがあ
り、鶏糞を好んで使ってくれる農家
が多い。

この地域が大都會の市場を前提と
した蔬菜産地であることで、鶏太の
コンポストも、四〇万羽分を全部処
理するには、いささか設備に無理が
あるため、生糞を取りに来てくれる
蔬菜農家の必要とする分量は、コン
ポストの補助に大きな役割を果たし
ていた。中でも韭は生糞との相性が
よいらしく、農家からのオーダーは
春先から定期的に来る。通常の施肥
は、元肥を入れた後には、作物の収
穫が終わるまではないのが普通で、
よほど完熟した鶏糞であっても、追
肥をすることはあまりない。
鶏太はある時、初夏に生糞を取り
に来た韭生産農家に、聞いたことが
ある。彼の話では、韭は非常に強い

野菜で、生糞を好むとのことであった。彼は、生糞を提供できる鶏卵生産者数軒をその時々に戻って生糞糞を入手することであった。

『有難いことは有難いが、何軒かを回らなければならないのは、ちよつと気になる。』

鶏太は、その時ふと気にはしたが、鶏糞の処理が羽数に追いつくことが最重要であり、昨年実施された家畜排せつ物法の制約で鶏卵生産農家が生糞を肥料として運搬することは原則禁止されているため、やむを得ない、と考えたものであった。

「葦は窒素を多く要求する上に非常に強い作物で、先ず生糞を元肥として施肥した上で種を撒きます。育った葦は刈り取られて出荷されますが、残った根に再度生糞を追肥して、さらに育てるのだそうです。こうして、生糞を追肥しながら何度も刈り取り、作物として収穫して、出荷することができるのだといいます。葦には生糞の中でも鶏の生糞が向いているとのこと、生をそのまま肥料として利用できる点では、特徴的な蔬菜です。」

茨城県の石岡、小川、涸沼エリア

は、県内でも葦の生産量が極めて多いことが注目されます。一方で、鶏の生糞が施肥されることにより、地域に伝染性鶏病がまん延する可能性も否定できません。しかし、これらの予防はあくまで養鶏産業界の責任に帰すべきもので、その予防は業界全体で自覚すべきテーマであると考えます」

その年の冬は概して暖かく、過ごし易かった。春になって、いつもの年より、強い風を伴って天候が荒れがちで、そのためか、春先に産卵の不調が気になるロットがあったものの、昨年来の餌付羽数の減少を追い風に、高卵価基調で過ぎる日々。いつの日か、鶏太はA Iの痛い思い出を風化させつつあった。

H P A Iの発生から一年を超え、当時の緊迫感もいつか過去のことになった意識は、行政でも同じく、三月まで実施していた養鶏場死亡数の確認作業が、『危険なフェーズが去った』との認識で解除された。こうした行政の姿勢は、生産者にもある種の安堵感を与えた。

生産者の中でも、昨年の危機的な緊迫感、今はない。

「源氏さん、このたびは本当に大変でしたネ！ お元氣そうで安心しました」

鶏太が、生産者の集まりに参加した時、隣の席に座ったT Mハッチャリーの角田が話しかけた。T Mハッチャリーには昨年のH P A I事件に際して、大ヒナ供給を受けた他にも発育鶏卵を分けてもらったり、その他の情報で種々の協力を得ている。

「いや、角田社長には色々ご協力をいただきましたまして、ありがとうございます。おかげさまで、これまでに復帰できました」

鶏太は、その折の感謝の念を込めて、素直に感謝の言葉を口にした。

「ところで、お宅では、この春に産卵が落ちたケースはなかった？」

と角田は問いかける。
「と、言いますと？」

鶏太は、なんとなく不審を感じて、
問い返した。

「うちの営業の話では、今年の一月
頃から、一過性に産卵の低下が見ら
れる鶏群があちこちで出ている、つ
て言うんですヨ」

角田は、答えた。

「そういえば、うちの分場でも一、
二群産卵の低下したものがあつた
な！」

鶏太は思い返ししながら、さらに問
いかけた。

「何が原因でしょうか？」

角田は、答える。

「IBでしょうかね。他に大した症
状もないようだし、産卵もすぐに回
復するようですヨ」

「うちでも二ロットほど、軽く産卵
低下したものがありましたよ。IB
だったんですか？」

鶏太は、角田に答えながら、思い
を巡らした。

「IBか！ そうかもしれないな。
そういえば、S先生にお願いしてい
る、モニタリングはどうなっている
んだらう。あれほどの大変な大騒動
も、過ぎるとつい忘れがちになる。

俺って、駄目なやつかな？」

S 獣医師に頼んだ、行政のA I モ
ニタリングについて、いつしか意識
が薄らいでいた自分に、ふと気づい
て、鶏太は気を引き締めた。

農場へ帰った鶏太は、亮太を呼ん
で聞いた。

「最近、S先生のモニタリングは繼
続してるの？」

「そういえば、最近先生来られな
いですネ。どうしたのかな？」

亮太は、何気なく答えた。

「そうか。俺も忙しくて注意しな
かったな。そういえば、死亡数の報告
も、A I が治まってからは必要ない
ことになったからな」

鶏太も神経質には捉えなかった。

「どうしましょう。S先生に連絡し
ましょうか？」

亮太は尋ねる。

「うーん。どうするか？ 必要なら、
また俺から頼むことにする。どうだ
い？ この頃。第一分場で一、二ロ
ットちょっと成績が振れたみたいだ
けど、本場で何もないかい？」

鶏太は答えながら、本場の状況を
確認した。

「大丈夫です。ここは若ばかりです
から、あれから入った最初のヤツな

んか、九六%で一カ月以上ですヨ！
これまでこんな成績の鶏はなかつ
た」

亮太は、ちよつと自慢げに答えた。
鶏太は、そのまま事務所へ戻った。

LPAI発生

それは、もう初夏といつてもよい
ほどの暑い日の夕方であった。今年
の六月は雨が少ない、空梅雨である。
鶏太が、この分では、今年の夏には
水不足になるのではないかと心配
するほどである。

本場のFAXがどこからの情報
を受けて、紙を吐き出した。ヒナ子
がそれを受けて目を通した。文字を
追いかける彼女の顔色が変わった。

「あなた。あなた！」

「なんだい？ 大きな声だね」

GPで、その日の出荷の準備をし
ていた鶏太は、やはり大声で答えた。
「大変です。またA I みたい！」

ヒナ子の声は、悲鳴に近い。
「そんな馬鹿な！ どこで？」

鶏太は、慌てて事務所に戻りなが
ら、問いかけた。

「すぐ、近く。今、家畜保健所から
の連絡ですヨ」

ヒナ子の声に、鶏太は事務所に戻
るなり、ひったくるようにFAXを
手に取り、目を通した。

FAXには、事務的な筆致で以下
の連絡が記述されている。

連絡

○X県東南家畜保健衛生所

所長 山瀬真弓 印

6月XX日に、当家畜保健所管
轄区域内のXY農場の病勢鑑定
で、鳥インフルエンザの抗体が確
認され、(独)動物衛生研究所におい
て、H5であることが判明し、高
病原性鳥インフルエンザの発生が
確認されました。

この結果、XY農場の二万三五
八〇羽は淘汰されます。

当該農場は立ち入りを禁止し、
これを中心とする半径五キロメー
トルの地域において、鶏卵、鶏お
よび生産にかかわる資材の移動を
禁止します。

なお、ウイルス分離結果は六月
X△日に判明します。

(株)ピーキーキューシー研究所代表
取締役／農学博士・獣医師)